

J **apanese text**

2010年 春/夏号 日本語編

Works

艸

画・文＝篠田桃紅

p.009

草にねて、

草の香に身をまかせつつ

夢を追う日の暮るるも惜しく

知人の若い日の作歌、春の日、若い身のよろこびも、感傷も、
哀惜もこもった忘れ難い一首。

(p.011) 左ページ・霞ヶ浦の湖面に反射する日を白帆に受け、帆引き船
が白い世界の中に溶け込む。

上・岸から離れたところに設置された鯉の養殖場へと至る橋。

下・霞ヶ浦は蓮根生産全国一。広大な蓮畑に蓮が咲き誇る。

(p.013) 写真は、かすみがうら市が主催し今年で10年目になる「霞ヶ
浦帆引き船フォトコンテスト」の入選作品から。観光帆引き船は7月下
旬～11月下旬の日曜・祝日に出航している。

かすみがうら市環境経済部観光商工課 Tel. 029-897-1111

www.city.kasumigaura.ibaraki.jp/hobiki/

自然

水辺の抒情

文＝編集部

p.010

たっぷりと風を孕んだ白帆が湖面をゆらゆらと動いていく。
船体を横向きにして風に流されているのは帆引き船だ。船
は長く伸びた縄で水中の網を曳いている。水深は最深部で
も7メートル。回遊するワカサギやシラウオを効率良く獲る
ために、明治13年(1880)、霞ヶ浦で考案された帆引き網
漁である。

茨城県にある霞ヶ浦は、総面積220平方キロメートルに
及ぶ、琵琶湖につぐ国内第二の湖。もともとは海と繋がって
いた入り江だったが、江戸時代からの度重なる治水事業に
より、現在では淡水湖となっている。水質汚染にも悩まされ
たが、徐々に改善に向かっており、関係者の努力が続く。

帆引き船は、この霞ヶ浦で、トロール船に完全に取って
代わられる昭和42年(1967)まで漁業の主役だった。一時
完全に姿を消すが、その後文化遺産の継承を目的に再建造
され、今は観光用に操業を行っている。

最盛期には200艘を超える帆引き船が霞ヶ浦で操業して
いたという。その壮観な夏の風物詩を再び見てみたいとは
思うのは、叶わぬ夢だろうか。